

教育研究業績書

2020年10月27日

所属：英語文化学科

資格：教授

氏名：富永 英夫

研究分野	研究内容のキーワード
英語学・英語教育学	総称文、レトリック、文法意識、気づき
学位	最終学歴
修士（英語学）	大阪大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得中途退学

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
1. インターネットテレビ会議システムを利用した異文化学習支援	2005年02月	オーストラリアのパースにあるカーティン大学と日本の大学をインターネットテレビ会議システムで結んで、情報交換をしたり、授業を行ったりする実験を行った。
2 作成した教科書、教材		
1. JAPAN'S WISDOM--How It Can Save the Future	2010年01月	かつて日本が持っていた価値観を再評価し、その時代の習慣を復活させることによって、未来の日本が抱えるだろう環境・社会制度・医療・介護等の諸問題に解決の糸口を与えることをテーマとする教科書である。
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
1. 神戸商科大学公開講座	1999年07月	「インターネット時代のコミュニケーション」というテーマでリレー講義の一コマを担当した。
4 その他		

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1 資格、免許		
1. 高等学校教諭一級免許（英語）	1984年03月	
2. 中学校教諭一級免許（英語）	1982年03月	
2 特許等		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
1. 文部科学省大学設置・学校法人審議会専門委員	2012年04月～2015年10月	
2. オーストラリア英語教育視察	2011年09月	
3. フィンランド英語教育視察	2010年09月	
4. タイ英語教育視察	2008年09月	
5. 韓国英語教育視察	2006年11月	
6. 京都大学大学院人間環境学研究科研修員	2003年10月～2004年03月	
7. 西オーストラリア大学客員教授	1994年02月～1995年02月	
4 その他		

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
1. 『最新英語学・言語学用語辞典』	共	2015年11月28日	中野 弘三, 服部 義弘, 小野 隆啓, 西原 哲雄 (監修), pp. 1-536, 開拓社	めざましい発展を遂げている英語学・言語学研究について、音声学、音韻論、統語論、意味論などの主要分野はもちろん、歴史言語学、社会言語学、認知言語学、英語教育、コーパス言語学などの様々な関連領域における重要な用語約3200語を取り上げて、11の分野に分けて簡潔・明解に解説する。用語間の相互参照を多く設け、分野内・分野間の有機的連関を図るよう工夫された学習者・研究者にとって必携の用語辞典。語用論関係の用語を20語句担当した。(すべて、単独執筆)
2. 『日本語大事典』[上・下巻2分冊]	共	2014年11月	佐藤武義, 前田富祺 (編集代表), pp. 1-2456, 朝倉書店	現在の日本語をとりまく環境の変化を敏感にとらえ、孤立した日本語、あるいは等質的な日本語というとらえ方ではなく、可能な限りグローバルで複合的な視点に基づいた新しい日本語学の事典である。大項目、中項目、小項目にわたり、十数項目担当した。(すべて、単独執筆)
3. 『国語からはじめる外国語活動』	共	2009年09月	森山卓郎(編)梅原大輔, 加藤久雄, 児玉一宏, 菅井三実, 富永英夫, 濱本秀樹, 森篤嗣,	平成17-20年度科学研究費補助金一般研究(C)「国語科の文法教育と英語科の文法教育の連携に向けての基礎的研究」による成果の一部である。国語教育と英語教育がいかに連携して、よりよい言語教育が

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
4. 『英語学用語辞典』	共	1999年01月	大津由紀雄, pp. 1-280, 慶應義塾大学出版会 荒木一雄(編) pp. 1-900, 三省堂	できるかという視点で書かれており、最新の日英語対称研究が盛り込まれている。分担箇所 (pp. 171-180(共著), 182-187(単著), 202-203(単著), 262-267(単著)) 英語学で用いられる専門用語を解説したコンパクトな辞典である。“Modal operator”(法演算子)等, 意味論・語用論関係の用語を十数語句担当した。(すべて単独執筆)
2 学位論文				
1. 1 “The Semantics of Temporal Conjunctions in English”(修士論文)	単	1984年01月	大阪大学大学院文学研究科	英語における時を表す接続詞が用いられた文の時制の照応現象を発話時(S)、言及時(R)、事象時(E)を使って時制構造を表すSRE理論で分析した。時制の照応が見られない場合に、本来、時を表す接続詞が因果関係を表すことを示した。
3 学術論文				
1. 「属性シテイル構文」の構文文法的考察(査読付)	共	2015年9月	森山卓郎, 梅原大輔, 富永英夫 『認知言語学研究』第1巻, 日本認知言語学会	「青い目をしている」構文を、「青い色をしている」のような構文(属性シテイル構文)との関係から捉え直すことによって、構文文法的に説明し、この構文の成立について、語用論的、認知的要因の関与を整理し、表現の成立可能性に関する連続性、主語名詞の有生性、身体部分の特性、通時的整合性などを統一的に説明した。
2. 日本人英語学習者は主語をどうとらえているか—量的・質的研究(査読付)	共	2014年3月	梅原大輔, 富永英夫 JACET Kansai Journal Vol. 16, pp. 103-122, 大学英語教育学会関西支部	日本人英語学習者が主語をどのようにとらえているかに関して、国立大学、公立大学、私立大学の188名の学生に対するアンケート調査、そしてその一部の学生に対する面談調査を行うことによって、量的および質的な研究を行った。結果として、主語を正確に理解しているグループ、主語をある程度理解しているものの、その使い方に一貫性がないグループ、そして日本語に影響され、文法上の主語性をほとんど理解していないグループに分かれることがわかった。
3. “CONSTITUENTS OF A GLOBAL MIND SET: AN EMPIRICAL STUDY WITH JAPANESE MANAGERS”(査読付)	共	2014年1月	S. Ananthram, R. Grainger, H. Tominaga JAPAN STUDIES REVIEW Vol. 18, A publication of Florida International University and the Southern Japan Seminar	The current research study surveyed Japanese international managers in the contemporary age of globalism, which comes, of course, some two decades after the start of Japan’s relative economic decline. After establishing the constructs by which the so-called “global mindset intensity” could be measured, a questionnaire survey and follow-up interviews were conducted for the purpose of establishing how Japanese international managers conceptualized an appropriate mindset for the global business era. Out of eleven constructs offered to them, only four were supported, and these were “personal and social skills,” “risk tolerance,” a “global identity,” and “international experience.”
4. 「英語教師のつぶやき—英語教育改革への提言—」	単	2012年10月	Discussion Paper 56, pp. 1-25, 政策科学研究所, 兵庫県立大学	日本における英語教育の歴史を踏まえて、英語教育に対する私見を述べた上で、英語教育改革に対する提言を行ったものである。構成は、第1章なぜ日本人は英語ができないのか?、第2章日本の英語教育論争史、第3章私の英語教育論、第4章海外英語教育視察報告、第5章英語教育改革への提言からなる
5. 「時法を表す現在時制」	共	2011年08月	中西充一, 富永英夫 『TAM研究論集』第8号, pp. 23-36, TAM研究会	英語の現在時制を認知言語学の枠組みで考察したものである。結論として、現在時制のプロトタイプ的用法は、非時間的な認識論的用法であり、従来基本とされてきた時間的用法は、むしろ認識論的用法の周辺の用法であること、また認識論的用法が話者の命題態度を表すことから、現在時制の表す意味は時法のカテゴリーを形成していることが明らかになった。
6. 「外国語活動に向けてタイにおける初等中等学校の英語教育が示唆するもの—」(査読付)	共	2009年03月	森山卓郎, 梅原大輔, 森篤嗣, 富永英夫, 濱本秀樹, 加藤久雄 『京都教育大学紀要』15号, pp. 47-61, 京都教育大学	タイにおける英語教育に関して、実際に現地の初等・中等学校を訪問して、その実態を考察したものである。タイには、ネイティブスピーカーを含めた、教員に対する再教育の制度があり、その結果レベルの高い教育がなされていることがわかった。指導方法は、コミュニケーション重視の教育を行うようにしているとのことであったが、実際には、文法の説明もきちんとなされており、バランスのとれたものであった。
7. “Rhetorical Devices in Japanese Advertisements: Towards a Taxonomy”	共	2008年03月	Ikuhiro Tamori, Donna Tatsuki & Hideo Tomimaga 『人文論集』第43巻, 第1・2号, pp. 59-115, 兵庫県立大学経済経営研究所	日本語の広告に用いられている、さまざまな表現上の工夫がなされた広告コピーの実例を収集し、その分類を試みたものである。英語の広告表現に関する先行研究で提示されている分類を出発点としたが、すんなりとその枠内に収まるものも多くあった一方で、その枠内に収まらない、日本語特有の工夫がなされているものも多くあることが明らかになった。

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
8. 「韓国における国語科教育と英語科教育—韓国春川市における授業実践の視察から—」(査読付)	共	2007年03月	加藤久雄, 森山卓郎, 梅原大輔, 児玉一宏, 菅井三実, 富永英夫, 濱本秀樹, 森篤嗣 『教育実践総合センター 研究紀要』Vol. 16, pp. 249-254, 奈良教育大学	韓国における国語科教育と英語科教育に関して、実際に現地の小・中学校を視察して、その実態を考察したものである。国語科教育では、動機づけを重視した表現教育に力を入れた指導がなされていたことがわかった。また、英語科教育では、小・中学校ともに教員の再教育制度があり、レベルの高い英語教育がなされていたが、指導方法は、特に目新しいものではないことがわかった。
9. 「情報通信機器を活用した教育の試み—インターネットテレビ会議システムを活用した異文化学習支援の可能性」	単	2006年03月	『兵庫県立大学経済経営年報』第36号, pp. 83-91, 兵庫県立大学経済経営研究所	現代のユビキタス・ネットワーク社会における情報通信機器を活用した教育、具体的には、インターネットテレビ会議システムを活用した異文化学習支援の可能性を検討したものである。結論として、このシステムは、異文化理解教育全般に有効活用が期待されるが、とりわけ海外留学の導入教育において有効な手段であることが明らかにされた。
10. 「英語総称文の意味について」(査読付)	単	2004年03月	『河上哲作教授退官記念論文集』pp. 299-310, 英宝社	英語の総称文の意味について考察したものである。従来から総称文の意味の特定に関しては、帰納的なアプローチと規約的なアプローチがあるとされてきたが、本論の結論としては、それはアプローチの問題ではなく、そもそも総称文自体に、世界を描写しようとする帰納的な総称文と世界を恣意的に切り取ることによって認識しようとする規約的な総称文があることを主張した。
11. 「総称文の本質について」	単	2004年03月	『人文論集』第39巻, 第2・3号, pp. 153-164, 神戸商科大学	英語の総称文の意味とは何かを再考したものである。結論として、総称文の意味は、外界との対応関係で真偽値を決定できるものではなく、言語使用者が外界をどのように解釈するかという、世界の理解の仕方、すなわち当該総称文が用いられる言語文化的状況における慣習あるいは共有された知識構造に基づいた判断と深く関係していることが明らかにされた。
12. 「英語の総称文について—種指示名詞句を伴う場合—」	単	2003年03月	『TAM研究論集』第7号, pp. 93-102, TAM研究会	英語の総称文のうち、主語位置に種指示名詞句を伴うものについて考察したものである。結論として、比較的よく用いられる形式のうち、単数定名詞句 (the lion) はある種の限定が加えられた総称表現で、他の種との対比が表されていること、単数不定名詞句 (a lion) は定義的な意味を持つことが多いこと、複数不定名詞句 (lions) は区分せずに全体としてみなす類を示すことが明らかになった。
13. 「英語の総称名詞句の分類と特徴」	単	2001年03月	『人文論集』第36巻, 第4号, pp. 91-101, 神戸商科大学	英語の総称名詞句とは何かを示した上で、その分類を行い、それらの特徴を考察したものである。結論として、総称名詞句とは、種 (kind) を指示する名詞句であり、一般的には、単数定名詞句 (the tiger)、単数不定名詞句 (a tiger)、複数定名詞句 (the tigers)、複数不定名詞句 (tigers)、非数定名詞句 (the water)、非数不定名詞句 (water) があること、そしてそれぞれの意味や特徴が明らかになった。
14. 「異文化理解とコミュニケーション」	単	2000年09月	『人文論集』第36巻, 第1号, pp. 129-138, 神戸商科大学	異なる文化や背景を持つ人々のコミュニケーションのあり方について考察したものである。結論として、それぞれの文化を尊重するという点で「同化」(melting pot理論)とは違い、またそれぞれの文化が接触することを積極的にすすめるという点で「異化」(salad bowl理論)とは違うが、「異化」の発展形である「通化」(salad with dressing理論)という新たな概念を提唱した。
15. 「英語の習慣文について」	単	2000年06月	『TAM試論集』第6号, pp. 57-64, TAM研究会	英語の習慣文の形態的および意味的特徴を調べ、総称文との共通点および相違点を考察したものである。結論として、両者は、名詞句と動詞句の違いはあるが、どちらも総称性を表す点で共通しており、習慣文は、経験的な事実に基づいて一般化がなされた、帰納的なタイプの総称文の一種であることが明らかになった。
16. 「言語学的恣意性とオノマトペ」(査読付)	単	2000年03月	『藤井治彦先生退官記念論文集』pp. 947-959, 英宝社	言語における恣意性について、言語学的恣意性を哲学的恣意性と区別した上で、その本質に迫ったものである。結論として、言語学的恣意性の本質は、言語による世界の切り取り方の恣意性であって、結果としてある言語体系は使用者にとって有縁的なものであること、そして恣意的な構成過程と有縁的な使用過程は同時並行的に進められていることが明らかになった。
17. 「日本語の叙述形容詞類と等位構造に関する覚書」	共	2000年03月	田守育啓, 富永英夫 『神戸商科大学七十周年記念論文集』pp. 473-483, 神戸商科大学	日本語における叙述形容詞類が等位構造をなしていると考えられるものに関して、その容認度の違いを調べ、その理由を説明したものである。結論として、第一に、二つの形容詞類が矛盾や反対といった対立概念を表す場合、文は容認されないこと、第二に、二つの形容詞類が類似概念を表す場合、文の容認度は低くなること、第三に、上記以外の場合、二つ

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
18. 「インターネット時代のコミュニケーション」	単	2000年01月	『人文論集』第35巻, 第2・3号, pp. 261-271, 神戸商科大学	の形容詞類の関連性の度合いが文の容認度に影響を与えることが明らかになった。 インターネットが我々の生活様式にどのような影響を及ぼすのかについて、特に人間が行うコミュニケーションのあり方の変遷を考察したものである。結論として、インターネットの出現を文字革命および印刷革命と並び称されるものとして位置づけ、すべての人が自由で対等なコミュニケーション手段を取り戻せた点で革命的なことである反面、匿名性による弊害や情報漬けの問題をはらんでいることを指摘した。
19. 「言語の恣意性について」	単	1998年12月	『人文論集』第34巻, 第1・2号, pp. 201-212, 神戸商科大学	言語の恣意性について、言語哲学史的な観点から再検討したものである。結論として、言語の恣意性は、言語による世界の切り取り方が原理的には恣意的であるということであって、切り取られた結果である言語体系は、必ずしも使用者にとって恣意的なものとは言えず、必然的なものにさえなっていることが明らかになった。
20. 「英語の叙述形容詞と等位構造に関する覚書」	共	1997年02月	田守育啓, 富永英夫 『人文論集』第32巻, 第3号, pp. 45-60, 神戸商科大学	英語における叙述形容詞が等位構造をなしていると考えられるものに関して、その容認度の違いを調べ、その理由を説明したものである。結論として、二つの形容詞の外延が交わりを持たない対立関係型と一方の外延が他方の外延を含む包含関係型は原則として容認されないのに対して、二つの形容詞の外延が適度な交わりを持つ交差関係型は容認度が高まるということが明らかになった。
21. 「英語における修辭的條件文に関する覚書」	共	1994年01月	富永英夫, 吉田仁志 『人文論集』第29巻, 第2号, pp. 23-33, 神戸商科大学	英語における修辭的條件文の諸特徴を示し、なぜそのような特徴を持つのかを考察したものである。結論として、修辭的條件文は、表面上はpならばqと主張しながら、実際は、qでないならばpでないという対偶を主張しているということが明らかになった。また、歴史的に見て、この種の修辭的條件文は、さまざまなタイプがあることも明らかになった。
22. 「日本語の等位構造からの抜き出しについて」	共	1993年02月	田守育啓, 富永英夫 『人文論集』第28巻, 第2号, pp. 17-31, 神戸商科大学	日本語における等位構造からの抜き出しについて、等位構造制約が適用されるかどうか、また適用されるとすれば、どの程度まで適用されるかを考察したものである。結論として、等位構造制約は、対照的等位構文に関しては、英語と同様に有効であるが、非対称等位構文に対しては適用されないことが明らかになった。
23. 「英語の時点を表わす副詞的名詞句」(査読付)	単	1992年07月	『成田義光教授還暦祝賀論文集』pp. 149-158, 英宝社	構造上は名詞句であるが、機能上は副詞句である、英語の時点を表す副詞的名詞句を考察したものである。結論として、英語の時点を表す副詞的名詞句は前置詞句と考えることができ、その中の名詞句の持つ素性によって、前置詞削除が義務的であったり、随意的であったり、不可であったりすることが明らかになった。
24. 「時制理論とプラトンの問題」	単	1991年12月	『TAM試論集』第4号, pp. 35-40, TAM研究会	時制理論における望ましい理論とはどのようなタイプのものなのかを考察したものである。時制構造を発話時(S)、言及時(R)、事象時(E)を使って表すSRE理論と一般の演算子理論を比較検討したが、結論として、SRE理論のほうが説明力および簡潔性どちらに関しても優れた理論であることが明らかになった。
25. 「英語の等位WH疑問文について」	共	1991年03月	田守育啓, 富永英夫 『人文論集』第26巻, 第3・4号, pp. 13-25, 神戸商科大学	二つ以上の情報を尋ねる英語の多重WH疑問文のうち、WH句が文頭において等位構造をなしているものに関して、その許容度の違いを母語話者を対象に調査し、なぜそのような違いが生じるのかを説明したものである。結論として、二つのWH句の統語範疇と意味範疇が同じという基準だけでは不十分で、それらがともに必須要素であるか、またはともに必須要素でないかのいずれかであることが必要であることが明らかになった。
26. 「SRE理論におけるReference Timeについて」	単	1989年08月	『TAM試論集』第2号, pp. 77-88, TAM研究会	時制構造を発話時(S)、言及時(R)、事象時(E)を使って表すSRE理論における言及時(R)の概念について再考したものである。結論として、SRE理論において、言及時(R)は必要不可欠な概念であり、その役割は、文の時制の照応にとどまらず、時間的にまとまりのある談話においても時のつなぎ手であることが明らかになった。また、文と談話の両方に適用される一般時制照応規則について定式化を行った。
27. 「時の副詞的名詞句」	単	1988年08月	『TAM試論集』第1号, pp. 63-76, TAM研究会	構造上は名詞句であるが、機能上は副詞句である英語の副詞的名詞句のうち、時を表すものをGB (Government and Binding) 理論の枠組みで考察したものである。結論として、時の副詞的名詞句に格を付与することは、構造格であれ、固有格であれ、不可能で

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
28. “On the Notion of Reference Time in the SRE Theory” (査読付)	単	1987年11月	Proceedings of the Eleventh Annual Meeting of the Kansai Linguistic Society, pp. 40-49, 関西言語学会	あり、副詞的名詞句は、文中の他の要素とは格関係ではなく、修飾関係で結ばれていることが明らかになった。 発話時 (S)、言及時 (R)、事象時 (E) を使って時制構造を表すSRE理論において、その扱いがわかりにくい言及時 (R) の存在意義を考察したものである。結論として、言及時 (R) は、SRE理論において必要不可欠なもので、文内にとどまらず、談話においても時のコネクターとして機能することがわかり、理論にとって重要な役割を果たしていることが明らかになった。
29. 「時制の照応再考」 (査読付)	単	1985年12月	『待兼山論叢』XIX, pp. 3-18, 大阪大学文学会	一般に時制の照応として扱われてきた言語現象を見直し、その本質を発話時 (S)、言及時 (R)、事象時 (E) を使って時制構造を表すSRE理論の枠組みで考察したものである。結論として、時制の照応とは、従属節が発話時 (S)、言及時 (R)、事象時 (E) で表示される非直示的時制の場合であり、従属節の言及時 (R) が主節の事象時 (E) によって決定される現象のことであることが明らかになった。
30. 「Before節の時制構造に関する一考察」	単	1984年12月	Osaka Literary Review XXIII, pp. 39-50, 大阪大学大学院英文学談話会	英語の時の接続詞beforeを含む文の時制構造を発話時 (S)、言及時 (R)、事象時 (E) を使って時制を表すSRE理論の枠組みで考察したものである。結論として、before節内で過去完了形を使うことによって、話者は従属節の出来事が起こった後に主節の出来事が起こるという、実際とは逆の順序を期待、もしくは予想していたことを表現しようとしていることが明らかになった。
その他				
1. 学会ゲストスピーカー				
2. 学会発表				
1. Analyzing advertisements for Japanese hot-spring resort inns : a story-based approach	共	2017年7月17日	15th International Pragmatics Conference	This paper presents a framework for analyzing tourism advertisements in terms of a “story” on which they are based. It particularly focuses on the advertisements for Japanese hot-spring resort inns or onsen ryokan.
2. The Role of Attributes in a Japanese Nominal Tautological Construction	共	2015年7月27日	14th International Pragmatics Conference	The aim of this paper is to analyze Japanese nominal tautologies from a pragmatic perspective. Japanese has various types of nominal tautologies, such as X-wa X, X-ga X, X-mo X, using different types of case markers. In this presentation, we will focus on the X-ga X construction.
3. 日本人英語学習者は主語をどうとらえているか 一量的・質的研究	共	2012年11月24日	大学英語教育学会関西支部大会 (京都産業大学)	本研究は、3つの大学の日本人学生約190人を対象に行った文法性判定テストと判定理由についての記述、追加的な面接の結果をもとに、学習者が英語と日本語の主語の違いをどのように認識しているのかを調べた結果の報告である。
4. “Constituents of global mind set intensity: empirical evidence from a study of Japanese managers”	共	2011年07月	Subra Ananthram, Richard Grainger & Hideo Tominaga International Conference of the Society for Global Business & Economic Development 12, Singapore Management University, Singapore	関西の製造業、エネルギー産業そして政令指定市にある商工会議所において聞き取り調査を行い、企業における国際化の実態を管理職の持つ国際的意識の観点から論じた。
5. “The Attributive Use of Japanese Light-Verb Construction: A Constructionist Approach”	共	2010年09月	Takuro Moriyama, Daisuke Umehara & Hideo Tominaga International Construction Grammar Conference 6, Charles University, Prague, Czech	日本語における「青い目をしている」構文を構文文法的観点から考察したもので、この構文は、語の意味からだけでは説明できず、構文としての意味があることを主張した。
6. 「レトリックとしての総称文」	単	2009年08月	京都言語学コロキウム年次大会, 京都大学	英語の総称文は、従来、真条件の意味の解明に関する研究が多かったが、本発表では、英語の総称文をレトリックの観点から考察した。
7. “A Structural Analysis of the Product Names Observed in Diet Supplements,”	共	2009年07月	Donna Tatsuki, Ikuhiro Tamori & Hideo Tominaga International Pragmatics Conference 11, University of Melbourne, Melbourne, Australia	商品名は、重要な広告表現であるという考えに基づき、その特徴をダイエット補助食品の商品名を例にとって考察した。

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
8. “Background Frame and Preference of Noun Phrase Form in Generic Sentences: A corpus-based Study”	共	2007年07月	a Hideo Tominaga & Hajime Nozawa International Cognitive Linguistics Conference 10, Jagiellonian University, Krakow, Poland	英語の総称文のうち、主語に単数定名詞句、単数不定名詞句、複数不定名詞句が用いられているものに関して、その意味用法の違いを言語コーパスを用いて、意味フレームの枠組みで考察した。
9. 「総称文についての一考察—発話行為論・認知言語学の観点から」	共	2004年12月	富永英夫、野澤元 日本語用論学会、甲南女子大学	英語の総称文のうち、主語に単数定名詞句、単数不定名詞句、複数不定名詞句が用いられているものに関して、その意味用法の違いを発話行為論・認知言語学の観点から考察した。
10. 「総称文についての一考察—発話行為論・認知言語学の観点から」	共	2004年12月	富永英夫、野澤元 TAM研究会、大阪大学	英語の総称文のうち、主語に単数定名詞句、単数不定名詞句、複数不定名詞句が用いられているものに関して、その意味用法の違いを発話行為論・認知言語学の観点から考察した。（日本語用論学会における発表の予行演習の発表）
11. 「総称性について」	単	2004年07月	TAM研究会、関西大学	総称性とは何かについて、名詞句における総称性と動詞句における総称性を並行的に論じながら、その本質に迫った。
12. 「英語の総称文について」	単	2004年01月	京都言語学コロキウム、京都大学	英語の総称文研究の歴史を概観し、総称文の意味の特定に関して、帰納的なアプローチと規約的なアプローチがあることを述べた。
13. 「英語総称文の意味について」	単	2003年06月	TAM研究会、大阪大学	英語の総称文の意味について考察したもので、従来から総称文の意味の特定に関しては、帰納的なアプローチと規約的なアプローチがあるが、それらの主張点を整理した。
14. 「英語の習慣文について」	単	2000年03月	TAM研究会、神戸松蔭女子学院大学	英語の習慣文の形態および意味的特徴を考察したもので、習慣文は、経験的な事実に基づいて一般化がなされた、帰納的なタイプの総称文の一種であることを示した。
15. 「時制の照応再考—認知論的観点から—」	単	1993年10月	TAM研究会、関西学院大学	時制の照応は、従来、統語現象として位置づけられることが多かったが、本発表では、認知論的観点から、すなわち言語使用者の認知のメカニズムの観点からの考察を試みた。
16. 「時制の照応再考—語用論的観点から—」	単	1992年12月	TAM研究会、関西学院大学	時制の照応は、従来、統語現象として位置づけられることが多かったが、本発表では、語用論的観点から、すなわち話者の言語使用の視点からの考察を試みた。
17. 「SRE理論変遷史—時制理論とブラトンの問題」	単	1991年10月	TAM研究会、大阪大学	時制構造を発話時(S)、言及時(R)、事象時(E)を使って表すSRE理論の歴史をたどることによって、時制理論における望ましい理論とはどのようなタイプのものなのかを考察した。
18. 「時の副詞的名詞句再考」	単	1990年11月	TAM研究会、大阪大学	構造上は名詞句であるが、機能上は副詞句である、英語の時点を表す副詞的名詞句を考察したもので、英語の時点を表す副詞的名詞句は前置詞句と考えることによる利点を述べた。
19. 「Review: K. Zagona (1988), Verb Phrase Syntax: A Parametric Study of English and Spanish」	単	1989年12月	TAM研究会、神戸松蔭女子学院大学	当時注目を集めかけていたK. Zagona (1988), Verb Phrase Syntax: A Parametric Study of English and Spanishの書評を行ったものである。
20. 「GB理論による時の照応の処理—名詞節補文の場合—」	単	1988年10月	TAM研究会、神戸松蔭女子学院大学	英語の名詞節補文を持つ複文構造における時の照応現象の定式化をGB (Government and Binding) 理論の枠組みで模索したものである。
21. 「時の副詞的名詞句について」	単	1988年06月	日本語学会、学習院大学	構造上は名詞句であるが、機能上は副詞句である英語の副詞的名詞句のうち、時を表すものをGB (Government and Binding) 理論の枠組みで考察したもので、副詞的名詞句は、文中の他の要素とは格関係ではなく、修飾関係で結ばれていることを明らかにした。
22. 「On Bare-NP Adverbs」	単	1987年11月	TAM研究会、関西大学	構造上は名詞句であるが、機能上は副詞句である英語の時点を表す副詞的名詞句をGB理論 (Government and Binding) の枠組みで考察したもので、それに対する格付与の可能性を探った。
23. 「SRE理論におけるReference Timeの存在意義について」	単	1986年11月	関西言語学会、大阪外国語大学	時制構造を発話時(S)、言及時(R)、事象時(E)を使って表すSRE理論において、その扱いがわかりにくい言及時(R)の存在意義を考察したもので、その必要性を主張した。
24. 「英語時制論—SRE理論をめぐる—」	単	1984年11月	阪大英文学会、大阪大学	英語の時制体系に関して、発話時(S)、言及時(R)、事象時(E)を使って時制構造を表すSRE理論の枠組みで考察したものである。時制体系を絶対時制と相対時制に分けて表し、時制の照応現象をわかりやすく解説した。
3. 総説				

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3. 総説				
1. 「翻訳の不可能性について」	単	2016年3月	『武庫川女子大学言語文化研究所年報』第26号, 武庫川女子大学言語文化研究所	翻訳の不可能性について考察し、翻訳は、困難を伴うが、不可能ではないこと、しかし原理的に不確定なものであることを述べた。これは、2015年12月12日に開催された武庫川女子大学言語文化研究所シンポジウムの発表に基づくものである。
2. 「自律的英語学習のすゝめ」	単	2016年3月	Newsletter No. 32, 武庫川女子大学英文学会	英語の自律的学習の重要性をわかりやすく述べ、それを強く推奨した文章である。この文章は、平成27年度武庫川女子大学英文学会春季大会の講演に基づくものである。
3. 書評：西山佑司『日本語名詞句の意味論と語用論—指示的名詞句と非指示的名詞句—』2003年	単	2004年12月	『語用論研究』第6号, pp. 115-121, 日本語用論学会	本著は、日本語名詞句を含む文の意味解釈の問題を詳細に検討したものであるが、特に変項を含む名詞表現の性質を明らかにすることによって、コンピュータを中心とした日本語名詞文について深く考察している。
4. 「意味論的な午後—総称文をめぐる対話」	共	1999年12月	濱本秀樹氏, 梅原大輔, 富永英夫 Osaka Literary Review XXXVIII, pp. 175-188, 大阪大学大学院英文学談話会	総称文の意味に関する考察をプラトンの鼎談形式で論述したものであるが、真理条件的な意味の解明は困難で、“Salience”が関わる機能論的な意味の解明の可能性を示唆している。
5. 「等位構造制約に関するアンケート調査とその結果」	共	1992年02月	田守育啓, 富永英夫, 岡田禎之 『研究資料』No. 125, p. 1-13, 神戸商科大学経済研究所	Rossが提唱した等位構造制約の妥当性を検証するための調査であるが、40の英語の等位構造文について、25名の母語話者インフォーマントに対するアンケートを行い、その結果をまとめたものである。
6. 書評：Comrie, Bernard: Tense, Cambridge University Press, 1985	単	1987年03月	『言語研究』第91号, p. 107-115, 日本言語学会	1976年に出版された、同じケンブリッジ・テキストブック・シリーズのAspectと二部作をなすと言えるもので、時制についての議論を簡潔にまとめており、英語以外の言語からの用例も豊富であるため、理論とデータのバランスがとれた教科書と言える。
4. 芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績				
5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
6. 研究費の取得状況				
1. 科学研究費助成金	共	平成21-24年度	研究代表者 梅原大輔	一般研究 (C) 「英語学習者および日本語学習者の言語意識に関する基礎的研究」 (課題番号：21520648)
2. 科学研究費助成金	共	平成17-20年度	研究代表者 森山卓郎	一般研究 (C) 「国語科の文法教育と英語科の文法教育の連携に向けての基礎的研究」 (課題番号：175306573631)

学会及び社会における活動等

年月日	事項
1. 2013年04月～2015年03月	日本英文学会関西支部大会準備委員
2. 2011年04月～2015年03月	阪大英文学会役員
3. 2010年04月～2012年03月	日本語用論学会事務局会計補佐、運営委員
4. 2008年04月～2010年03月	日本語用論学会事務局会計担当、運営委員
	大学英語教育学会
	日本英語学会
	日本英文学会
	阪大英文学会
	日本語用論学会